

図書館だより



2022年7月

森村学園中高図書館

梅雨が明けたあと、再びぐずついた天気が続くことを、戻り梅雨というそうです。猛暑、熱中症という言葉を見ない日はないほど、急激な暑さの中の期末試験でしたが、夏休みも目前、間もなく終業式。長いお休みを、健康に気をつけて有意義にお過ごしください。

新着図書紹介

こちらは中高図書館にあります。身分証明書で借りられます。



『香君』

上橋菜穂子著

文藝春秋

国際アンデルセン賞受賞作家の最新作。壮大なファンタジー長編。



『<自分>を知りたい
君たちへ 読書の壁』

養老孟司

毎日新聞出版

書評集。人生の先輩のすすめる本は？



『10代と考える「スマホ」』

竹内和雄 岩波書店

ジュニスタ

さまざまなテーマを読めるジュニアスタートブックが図書館に入っています。



「知識ゼロからの
異常気象入門」

齊田季実治著

幻冬舎

大雨、台風、ゲリラ豪雨。命を守る知識をもちたい。

一度は読んでおきたい現代の名短編
がっかり妖怪大図鑑
恋文の技術
幸福な食卓
三四郎はそれから門を出た
思考の持久力
戸村飯店青春100連発
ハケンアニメ！
ビーカーくんとそのなかまたち
ビーカーくんのゆかいな化学実験
ヤングケアラーってなんだろう
13歳からの地政学 カイゾクとの地球儀航海

こちらは
電子図書館
新着図書

森村学園中高電子図書館は、
こちらからご覧下さい。

森村学園HP→図書館のページ→
森村学園電子図書館

<https://web.d-library.jp/mori>

利用者IDとパスワードは、どちらも
学籍番号です。
初回ログイン時にパスワードの変更
を求められます。
自分で新しいパスワードを設定して
ください。

先生インタビュー

国語科 大村咲希先生 インタビュー



早速ですが、先生イチオシの本が出たそうですね。

4月に刊行された『ふりよの星』という川柳の句集です。

私は大学時代短歌のサークルに入っていたのですが、そのサークルの後輩である暮田真名さんという方の本です。彼女も初めは短歌を作っていたのですが、途中から川柳を中心に作るようになりました。友人の作品が本になるのは感慨深いですね。

はじめから、暮田さんのセンスには驚き続けていました。中高生にも読んで驚いてほしいと思います。

暮田さんの川柳は、破調ですよ？

七・七の句が多いのですが、これは五・七・五ではないけれど川柳では一般的な形だそうです。ほかの破調もありますね。

川柳の中でも芸術性の高い「詩性川柳」と呼ばれているジャンルです。サラリーマン川柳やシルバー川柳とはまったく異なり、文芸として尖っていった川柳は、普段わたしたちには読む機会がなかなかないのですが、面白いです。

暮田さんが最初に川柳を知ったきっかけのイベントを主催した小池正博さんの川柳は、

<はじめにピザのサイズがあった>

とか、暮田さんからよく名前を聞く川柳作家の石田柊馬さんの作品は、

<ヘルシンキオリンピックの角砂糖>

<妖精は酔豚に似ている絶対似ている>

とか。こういうなぞの五・七・五とか七・七とかそうじゃないもの……があると知って、びっくりしました。

『ふりよの星』は、一般の書店でも売っていますし、ヴィレッジヴァンガードには特典のシール付で置いています。

また、帯は暮田さんの好きなDr.ハインリッヒさん（芸人）に書いてもらっていて、表紙は吉田戦車さんという夢のような豪華メンバーです！

本の装丁を若い人が見たときに、興味をひかれると思いますが、ではタイトルの「ふりよの星」の「ふりよ」が何か？ということは、作品の中で説明があるのですか？

それが……、説明はないのです！ どういう意味なのでしょうね。
作品もそういうものが多いです。何だろうと思っても、突き放されるような……。

それは、造語なのですか？

暮田さんの川柳には造語はあまりなくて、ふつうは使われない使い方と言葉の使い方をずらしてある、という形なのでこれもそうかなと思います。

思いがけないという意味の不慮でしょうか……。

ですかねえ。

短歌会で暮田さんと知り合って、川柳だけでなく、彼女のファッションや趣味にも衝撃を受けました。私が大学に入って世界が広がったと思ったのは、そういう人との出会いです。

先生は、短歌を、大学生の頃から始めたのですか？それとも、小さい頃から続けているのですか？

始めたのは高校1年生か2年生か、そのころですね。もともと小さい頃から本は好きで、最初は小説を書きたくて。小説をちゃんと書き上げたことがないのに、小説を書きたいという、実を伴わない希望だけがありました。でも書くことが好きだったので、ほぼ日記のような詩を、私なりの文学的な表現を使って書いていました。それが中学生のときです。そして、高校生になってから短歌に出会いました。柘野浩一さんの歌集を地元の図書館で見つけたことがきっかけです。それから、短歌を書きだしたら、とてもしっくりきました。それまでの日記や詩は、自分でもあまりいいとは思えなかったのです。でも、短歌だったら、この長さがちょうどよくていいと思えました。短歌は私に向いている、文学にしていけるんじゃないかと思って雑誌などに投稿をするようになりました。

波長が合ったのでしょうか？

そうですね。私にとって、たぶん俳句は短すぎ、小説は長すぎるのでしょうか。単純ですが。私に短歌が合っていると思う要素はいろいろあるのですが、一つは長さです。

短歌は、最初に状況を詠んでいて、最後にページをさっとめくられるような、思いがけない展開がありますね。そこに、切り替えの早さを感じます。私小説を読んでいるような、他人の日記を読んでいるような感想をもちますね……。

短歌も色々ありますが、私の短歌は、そういう感じだと思います。近代以降の短歌は「私性」（作品の主人公が、多くは作者と捉えられる一人の人に紐づくこと）の文学である面が大きいのですが、おおむねそれに乗っかっています。言葉派よりは人生派というか。また、どこまで書いてどこまで書かないか、ということが短歌のキモになるのだと思うのですが、私の場合その感覚も短歌の呼吸と合うのだと思います。

同人誌を作っているのですか？

大学短歌会時代に同じ歳の人たちと同人誌を作って、大学卒業後も活動しています。自分たちで原稿を作って本の形にしています。

先生は、どのような短歌を作るのですか？

私（の作風）に一番近いのは、俵万智だと思います。短歌を始めた頃に影響を受けたのは柘野浩一、憧れたのは穂村弘なのですが、結局は俵万智に近いと思います。

斬新で古典的なのでしょうか？

俵万智は人生でそのとき何をしていたか如実にあらわれる歌を作っていると思いますが、私もその傾向です。

俵さんの歌は、人生や生活が分かる歌ですね。

そうですね。それから文体の飾らなさも近いと思います。俵万智の、一見平易だけど実は修辭にすぐれているというのは目指したいところです。

歌人ではありませんが、同じく一見平易だけど技術がある作品を書く作家として、俵万智と同時期にデビューした吉本ばなながいます。私は卒論も修論も吉本ばななについて書いていて、好きな作家です。研究のために『キッチン』が出た当時の書評を見ていたら、「吉本ばななを添削する！」というような勢いの書評家もいました。言葉づかいが間違っているとか、「私がこの世でいちばん好きな場所は台所だと思う」という書き出しの一文は、自分のことを語っているのに他人のこのように「思う」と表現されていておかしいとか。同時代に俵さんは「短歌をキャッチコピーにした」と批判されがちでした。今『キッチン』や『サラダ記念日』を読むとそれが現在のスタンダードになっていると感じますが。私自身も自然に影響を受けました。

先生は日頃短歌を作っていると思いますが、そのための「ことば」を増やすにはどうしたらいいでしょう。

ことばを増やすとしたら、やはり古典から現在のベストセラーまで、本を読むということでしょうか。私自身は、短歌を作る上で語彙を増やすために意識して努力してきたのではなくて、むしろ日常の言葉でどれだけ詠めるかを考えてきた気がします。自分たちが使っていることばで、つぶやきにならずに作品として成立できるかを考えます。

たとえば、先生の短歌を作る体験を生徒に伝えるにはどういったことを伝えたいですか？

まだ実践には至っていませんが、作る前にまず短歌を知ってもらいたいなと思っています。授業に組み込むとしたら、古典文法の解説をするときに私のおすすめの短歌を例文にするとか……？ また、短歌を詠む（作る）だけではなくて、読む（評する）ことで個性を発揮することもできるのは知ってほしいですね。

高校生のときの体験で、ふつうであれば言い過ぎだとか変だということでも、短歌にすると文学になるということに気づきました。友達に言って変な感じになったことをどうにか五七五にして投稿欄に送ったら歌人の方にコメントしてもらえたときは嬉しかった。そういうことも短歌にのめり込んだきっかけです。ふつうに言ったら恥ずかしいことも短歌にすれば文学になるということ。これも伝えたいですね。変なことを言ってもいい……。短歌を作ることについておすすめの本は、私が短歌を作りはじめた頃に読んだ、柘野浩一

さんの『かんたん短歌の作り方』です。私はそれを読んで多くのヒントをもらいました。

最後に生徒に向けてメッセージをお願いします。

案外、日常生活で自分に見える世界は狭いものです。

世の中には、びっくりするような読みものが沢山あります。初めにお話しした川柳もそうですが、私は大学の文学部の授業で高橋源一郎なんかを読んでびっくりしました。自分の手の届く範囲だけでなく広く読んでみることをおすすめしたいです。では、どうしたらいいかというと、先生のおすすめの本を読むとか、ブックガイドの類を参考にしてみるとか、本屋さんで普段は読まないような本を手取るなどですかね。案外自分の知らない面白いものはたくさんあるよ、と伝えたいです。

あとは、名前だけ知っている古典を読んでみるといいと思います。古典の名作というのは、やはりすごいと思うものが多いです。

おすすめの本をお願いします。

高校生のとき短歌とは別に、『枕草子』が好きでした。

授業で国語の先生が（清少納言の仕えた）定子さまのこと、清少納言と定子さまの関係がいに良いものだったかを熱く語ってくれて憧れました。その頃、枕草子を下敷きにした沖方丁『はなとゆめ』を読んで清少納言観に非常に影響を受けました。すてきな世界、すてきな関係が描かれていて。高校生のときは清少納言に感情移入して、清少納言になりたいと思っていました。私の定子さまがいたらなあ、と。

清少納言・枕草子の研究も進んで別の捉え方もありますが、私のお気に入りの読み方の線では『はなとゆめ』がおすすめです。古典の授業が楽しくなるのでは！

今日は、短歌と古典文学のお話しを、有り難うございました。

大村先生のおすすめの本です。

『ふりよの星』 暮田真名 左右社



『はなとゆめ』 沖方丁 角川文庫

